家庭科教員の指導実態からみた製作活動の教育的意義

多々納道子*・竹吉昭人**

Michiko TATANO, Akihito TAKEYOSHI

A Study of Educational Significance of Learning to Sew by Home Economics Teachers.

ABSTRACT

本研究では、小学校家庭科教員を対象に調査を行い、布を用いた製作活動の指導実態やその教育的意義をどのように捉えているのかなどを明らかにし、今後の製作活動のあり方を検討するための基礎資料を得ることを目的とした。

家庭科教員が、製作活動の教育的意義として強く捉えていたのは、生活技能の習得とものづくりとしての達成感・満足感の2点であった。また、製作活動を指導した教員からみて、子ども達は他の教材よりも意欲的に取り組んでいた。これらのことから、製作活動を中核にした衣生活学習を進めることが重要であるといえる。したがって今後さらに、被服材料、着方や手入れについても学習できるように、総合的な取り扱いができるような教材や指導方法の工夫を検討することが課題となる。

［ キーワード：布を使った製作活動、衣生活学習、製作活動の意義、教員の指導実態 ］

Ⅰ．目的

家庭科において重視してきた布を用いた製作活動や被服製作の教育的意義は、種々に論議されてきたが[1) 2) 3)]、家庭科を一般普通教育と位置づけた場合には、生活に必要な知識や技能の習得という実用上と製作を通して人間形成を図るという心身陶冶上に大別できる。

これまでの家庭科のあゆみを概観すると[4) 5) 6)]、布を用いた製作活動や被服製作は家庭生活に必要な知識・技能の習得を主要な目的としていたと理解できる。ところが、被服の既製化に端的にみられるように、衣生活の変化によって家庭での製作は必ずしも重要でなくなり、実用上の価値や意義が大きく変化してきた。加えて、ゆとりの中で生きる力の育成を重視する現行の教育課程での教科の時数減によって、家庭科での布を用いた製作活動や被服製作は、大幅に縮小されてきた[7)]。これらのことから、各学校段階の製作活動の位置づけや教材に系統性や一貫性がみられないという課題が生じてきている。

一方、小学校家庭科における布を用いた製作活動の学びの実態をみると、性差はあるものの子ども達は製作活動に興味や関心をもって意欲的に取り組んでおり、家庭科を好きな理由として、布を使って物を作る楽しさをあげているものは2/3を越えていた[8)]。また、小学校家庭科の学習をほぼ終えた６年生が、衣生活に関して今後さらに学習したいと思っているのは、製作活動に関する内容が最も多いことが明らかにされている[9)]。

このような子ども達の学びの実態をふまえると、実用上の価値の変化によって、直ちに布を用いた製作活動を減らすことを考えるのではなく、高等学校家庭科衣生活領域において指導のあり方が提案されているように[10) 11)]、製作活動の魅力や意義を改めて問い直し、家庭科における位置づけや指導方法を検討する必要がある。

そこで本研究では、まず島根県の小学校家庭科教員を対象に布を用いた製作活動の指導実態やその意義をどの様にとらえているのかなどを明らかにし、今後の製作活動のあり方を検討するための基礎資料を得ることを目的とした。

Ⅱ．方法

調査は島根県内の公立小学校の中で、全学年で６学級以上ある183校の中から、無作為に69校を選び、家庭科担当教員を対象に実施した。有効回答数は、男性教員20人、女性教員113人であった。調査は、質問紙法で郵送調査により、2004年２月中旬～３月下旬に行った。

調査内容は、1 教員のプロフィール、2 家庭科および家庭科以外での製作品、3 教員からみた製作活動への児童の取り組み、4 製作活動の指導上の重点、5 製作活動の指導上の課題、6 小学校家庭科における製作活動の意義などであった。

Ⅲ．結果および考察

１　教員のプロフィール

（1）男女の比率と年齢構成

家庭科担当教員の男女の比率と年齢構成は、表１に示される通りである。

まず家庭科担当教員の性別をみると、85.0％が女性教

*　島根大学教育学部人間生活環境教育講座
**　広島県北広島町立壬生小学校

員で、15%が男性教員という構成であり、女性教員に極めて偏った担当方法がとられていた。

その年齢構成は、男性教員は「30～39歳」55.5%と「40～49歳」40.0%にピークがあり、これら二つの年齢構成の教員によって、ほとんどを指導しているといえる。女性教員では「40～49歳」48.7%にピークがあるだけで、その他に種々の年齢構成の教員によって指導している実態にあった。

表１　男女の比率と年齢構成

人(%)

	20～29歳	30～39歳	40～49歳	50歳以上	合計
男性	1(5.0)	11(55.0)	8(40.0)	0(0.0)	20(15.0)
女性	15(3.3)	24(21.2)	55(48.7)	19(16.8)	113(85.0)
全体	16(12.0)	35(26.3)	63(47.4)	19(14.3)	133(100.0)

(2) 担当方法と指導経験年数

表２より家庭科の担当方法をみると、男性教員は95.0%とほとんどが「学級担任」として指導していた。これに対して、女性教員では「学級担任」が44.2%、「出張授業」は23.0%、「専科」19.5%というように、学級担任が最も多いものの、多様な方法で担当しており、男女教員間の差異が顕著であった。

表２　担当方法

人(%)

	学級担任	出張授業	専科	担任&出張	その他
男性	19(95.0)	0(0.0)	1(5.0)	0(0.0)	0(0.0)
女性	50(44.2)	26(23.0)	22(19.5)	13(11.5)	1(0.9)
全体	69(51.9)	26(19.5)	23(17.3)	13(9.8)	1(0.8)

指導経験年数は、表３に示すように男女教員とも「２～５年」が40%台と最も多く、次いで男性教員は「１年」が30.0%、「６～７年」20.0%であった。女性教員は「２～５年」に次いで、「６～７年」が28.3%、「１年」が15.9%であり、男性教員に比べて指導経験年数が若干長いという傾向が認められた。

表３　指導経験年数

人(%)

	1 年	2～5年	6～10年	10年以上
男性	6(30.0)	8(40.0)	4(20.0)	2(10.0)
女性	18(15.9)	52(46.0)	32(28.3)	10(8.8)
全体	24(18.0)	60(45.1)	36(27.1)	12(9.0)

小学校家庭科では、近年専科教員や出張授業による指導が減少し、性別を問わず学級担任が指導する方法に変化してきているが、島根県ではまだ女性教員が指導するという傾向の強いことが明らかとなった。そのためもあってか、専科や出張授業を含めて種々の方法で指導していることが、また指導経験年数も自ずと男性教員より長くなっていることが理解できた。

2　家庭科での製作物

家庭科教員が担当学級において、実際に指導した製作物を自由記述で求め、上位のものをまとめたのが、表４である。

表４　製作物

人(%)

５年生		６年生	
小物	47(60.3)	小物	10(13.5)
ぞうきん	6(7.6)	マガジンラック	4(5.4)
ランチョンマット	23(29.5)	袋類	48(64.9)
ウォールポケット	15(19.2)	カバー類	76(102.7)
袋類	44(56.4)		

５年生担当の教員は、その60.3%が「ティッシュ入れ・コースター・ペンケースなど」の小物類を指導していた。次いで「ナップザック・トートバック・巾着」の袋類は56.4%、「ランチョンマット」29.4%、「ウォールポケット」19.2%という順位であった。６年生の担当教員は全員が「エプロン、クッション、まくらカバー、ティッシュカバー」のカバー類を製作物として上げていた。そして、「ナップザック・トートバック・巾着」の袋類は、教員の74.3%が製作物としていることから、カバー類と袋類の両方を製作しているケースが多いといえる。その際、カバー類と袋類という中では、いくつか題材の選択肢があり、それらの中から子ども自身が選択して製作するというパターンが取られていることが明らかとなった。

このように各学年での製作物の状況から、製作活動の特徴をみると、５年生では小物類の製作に加えてランチョンマット、ウォールポケットと袋類の中から題材を選んで製作していること、さらに袋類の場合は、ナップザック、トートバッグか巾着という題材の中から自分の好みに応じてどれかを選んで製作するというように、２段階の指導がなされているといえる。また、小物類についても、１人の教員が複数の製作物を記述していることから、子ども達の作りたいという希望を重視して製作物が選択されていることが伺えた。このように、まず小物を製作することによって縫い方の基礎を習得し、習得した知識や技能を活用して、次に大きな製作物の製作に挑戦していることが理解できた。

さらに本調査時点から遡って、2002年以前に指導した製作物について尋ねたところ、小物、エプロン、ナップザック、クッションやウォールポケットが上げられていた。現行の教育課程（1998年改訂）では、具体的な題材指定はなくなったが、子ども達の実態、授業時数や製作物の系統性などを考慮して、改訂前に製作物として上げられていたものが、ほとんどが踏襲されたものと考えられる。

他方で、教員の自由記述から、今日の教育課程での５年時60時間、６年時55時間という限られた時間では、それぞれの段階で製作物が一つにならざるを得ないという問題提起が多くなされていた。

製作物を個別に見ると、トートバックやナップザックの袋類のように５年と６年の両学年で取り上げられているものがあった。これは小学校家庭科の題材指定が、ご

はんとみそ汁のみであることから、布を用いた製作の題材が自由に考えられたことによるものと考えられる。しかし、布を用いた製作には技能の習得が伴うので、２か年を見通した上で各学年でどんな力を付けたいのか、そのためには何を製作すればよいのか、製作活動や製作物の系統性などを明確にする必要がある。

３　家庭科以外での製作物

家庭科以外での学校における製作活動の実態を、教員による自由記述で求めたところ、学級活動、学年活動、総合的な学習の時間、生活科、児童会活動やクラブ活動など、多岐にわたって製作されていた。それぞれの活動における具体的な製作活動を示すと、次のようであった。

(1)　学級活動（回答数10件）
・卒業記念品の製作（カバー類、カーテン、玉入れの玉など）
・クリスマス会（クリスマスツリー、プレゼントの小物）
・学級旗
・エイズ教育のためのメッセージキルト
・その他（カバー類、ぞうきん、花びんしきなど）

(2)　学年活動（回答数８件）
・卒業記念品として、学校、下級生やお世話になった方々への贈り物製作（トイレットペーパーホールダー、マスコット、ぞうきんなど）
・登校班の班旗、応援旗、集団宿泊訓練で用いる班旗
・福祉活動として、施設入居者へのプレゼント
・その他（ぞうきん、ミトンぞうきん）

(3)　総合的な学習の時間（回答数14件）
・卒業記念品（ランチョンマット、カーテン止め、カバー類、タペストリー、特殊学級へのプレゼント）
・「収穫祭りをしよう」でお世話になった方々へプレゼントとしてランチョンマット
・「古墳の森再生プロジェクト」のファッションショー用の衣装
・民族服
・福祉活動（ハンカチ刺しゅう）
・卒業文集の表紙製作（藍染め）
・お年寄りとの交流会でお手玉を製作
・英語学習でハロウィンの仮装作り
・フェリーとの交流のための旗
・その他（マスコット）

(4)　生活科（回答数７件）
・「昔の遊びをしよう」でのお手玉作り
・「染め物をしよう」での布の染色

(5)　児童会（回答数９件）
・運動会で用いるものの製作（応援旗、衣装、エプロンなど）
・縦割り班の班旗
・学校祭り用のマスコット

(6)　クラブ活動（回答数33件）
・家庭科クラブ、手芸クラブ、ハンドクラフトクラブ、リフォームクラブでの製作（小物、マスコット、刺しゅう、編み物、ワッペン、ぬいぐるみ、テーブルクロス、ランチョンマット、袋など）

以上のように、最も多くの活動があったのは、クラブ活動であった。家庭科以外の教科や活動において、布を用いた製作活動が積極的に行われていることは、なすことによって学ぶことの学習効果が大きいことが理解されているものと思われる。

４　教員からみた児童の製作活動への取り組み

教員からみた製作活動への児童の取り組みは、表５に示すように、「全体的に家庭科の他の題材と比べて、意欲的に取り組んでいる」と評価するものが、男性教員75.0%、女性教員61.1%であり、かなりの割合を示した。このことは、「全体的に家庭科の他の題材に比べて意欲が低い」と答えた教員が一人もいなかったことにもあらわれている。子ども達にとって製作活動は、興味・関心をもち、意欲的に取り組める活動であることを本調査においても実証するものであった。

しかしながら、全体的には意欲をもって取り組んでいるものの、「製作に対する意欲に、個人差が大きい」という捉え方もなされており、製作に対して意欲のもてない子ども達への働きかけや指導上の創意工夫をすることが、今後の課題であるといえる。

さらに、「製作活動の作業内容によって、取り組む姿勢が異なる」ということへは、単独では指摘されていなかったが、他の項目と兼ね合わせて上げられていることから、子ども達が意欲をもって取り組める教材の開発、あるいは子ども達がつまずく過程での指導の工夫が必要

表５　教員からみた児童の製作活動への取り組み方

人(%)

	①全体的に家庭科の他の題材に比べて､意欲的に取り組んでいる	②全体的に家庭科の他の題材と比べて意欲が低い	③全体的に家庭科の他の題材と比べて、意欲に違いはない	④製作に対する意欲に、個人差が大きい	⑤製作活動の作業内容の違いについて、取り組姿勢が異なる	①＋④	①＋⑤	③+④	④＋⑤	①＋④＋⑤	①＋その他
男性	15(75.0)	0(0.0)	2(10.0)	2(10.0)	0(0.0)	1(5.0)	0(0.0)	0(0.0)	1(5.0)	0(0.0)	0(0.0)
女性	69(61.1)	0(0.0)	8(7.1)	9(8.0)	0(0.0)	14(12.4)	1(1.0)	1(1.0)	8(7.1)	1(1.0)	2(1.8)
全体	84(63.2)	0(0.0)	9(6.8)	11(8.3)	0(0.0)	15(11.3)	1(0.8)	1(0.8)	9(6.8)	1(0.8)	2(1.5)

であるといえる。

5　重点をおいて指導している事項

担当教員が重点をおいて指導している点は、表６のように、「製作に必要な知識・技能を習得させる」と「物を作る喜びや達成感を味わわせる」の２点がともに80%以上と、特に高い割合を示した。次いで割合の高かったのは、「衣生活に関する興味・関心を高める」と「日常生活における実践力を高める」で、ともに36.1%を占めた。物をつくる喜びや製作に必要な知識や技能を身に付けた上で、これらを衣生活全般の興味・関心を広げたり、日常生活での実践につなげたりといった発展を意識した指導がなされていると考えられる。

男女教員間で指導上の重点に違いがみられたのは、「創意工夫ができるようになる」であった。このことから、技能面において男性教員が、より基礎・基本の定着に重点をおいているということが考えられる。また、男性教員の製作経験不足から、創意工夫をするところまでに発展できないということもあるかもしれない。

近年、教育活動全般において、個性を生かす、個性の重視が求められている。製作活動においても当然のことながら、重視されるべき観点である。今回の調査においては、教員は個性を生かすという観点を重視しているという実態ではなかった。このことは、小学校という発達段階と製作活動の系統性を考えた上で、まず、基礎・基本の定着を重視しているとみなすことができる。

6　製作活動の指導上の課題

製作活動を指導する際に特に困難だと感じることを通して、指導上の課題を上げてもらった。

その結果を表７に示すように、全体でみると「子ども達に製作に必要な知識や技能を定着させること」54.1%、「用具（ミシンなど）に関すること」51.9%と「実習にあてる授業時間に関すること」50.4%の３点は、過半数を超えて多くの教員が課題としていることが明らかになった。次いで、「授業をサポートしてくれる人材の確保」39.1%、「子ども達一人ひとりの進度に対応すること」29.3%が、課題として上げられていた。

このように多くの教員が課題としていた製作時間、道具類の充実と授業サポートの人材の確保については、製作活動をスムーズに進めるために重要な条件整備である。これらの点が指導上の課題として考えられているので、子ども達に製作に必要な知識や技能を定着させることが、次なる課題として指摘されたものと考えられる。男性教員と女性教員との間で指導上の課題として、違いがみられたのは、「子ども達一人ひとりの進度に対応すること」（男性教員：65.0%、女性教員：23.0%）、「自分自身の被服などの製作経験に関すること」（男性教員：25.0%、女性教員：5.3%）の２点であった。

このような課題が上げられたのは、これまでの家庭科は男女の違いによる学習経験の差異が大きく、この差異による指導力の違いが大きな要因になっているものと思われる。

各教科の指導に関して、小学校段階では学級担任が指導することのメリットは大きいものがある。特に家庭生活を対象とし、生きる力の育成を目的とする家庭科では、学校と家庭との緊密な連携が必要欠くべからざるものである。したがって、今回明らかになった男女教員という性差だけでなく、教員個々の差異もあるので、学級担任としてスムーズに指導できるように、研修を行ったり、教員へのサポート体制を設けたりすることが必要になる。

7　小学校家庭科における製作活動の意義

実際に製作活動を指導した教員が、製作活動の意義をどのように捉えているのかを明らかにした結果を表８に示した。

製作活動の意義として捉えているのは、男女教員ともほぼ一致していた。全体でみると、「生活技能の習得」93.2%と「ものづくりとしての達成感・満足感」76.7%とこれら二つが、群を抜いて多いものであった。次いで「生涯学習へつなげること」が40.6%であった。

逆に、製作活動の意義として重視していないのは、「将来の進路選択に役立てる」2.3%、「繊維や布の性質の理解」9.8%と「感性の育成」9.8%であった。

以上のように、小学校段階での布を用いた製作活動については、技能の習得とものつくりの達成感やつくる喜びを味わうという二つを、意義として強くとらえていることが理解できた。

家庭生活における製作活動の必要性は薄れつつあるものの、小学校での製作活動を通して学ぶ知識や技能は、基礎的・基本的なものとして、実生活においても必要不可欠であるという理解から、製作活動の意義として重要な位置づけをしているものと考えられる。同時に、製作活動を通して得られる達成感や満足感を味わうことの重要性、あるいは製作活動を生活技能の習得と位置づける一方で、製作するものが衣生活に関わるものとしてだけ捉えるのではなく、もっと広い意味でのものつくりを通して得られる達成感や満足感を味わうことを重要な意義として捉えていることが理解できた。

さらに、布を用いた製作活動の意義としてとらえていることと重点を置いて指導している事柄には関連性がみられ、製作活動の意義として理解している事柄に重点をおいて指導をしていることが明らかになった。

Ⅳ．まとめ

製作活動の現状としては、「製作に必要な知識や技能の習得」、「ものを作る喜びや達成感を味あわせる」ことに重点をおいた指導が行われていた。具体的な製作物は、1998年改訂以前の学習指導要領において指定されていた製作物がほとんど取り上げられていた。

また、児童の取り組みについては、全体的にみて大変意欲的に取り組んでいるものの、男女差や個人差が認められた。指導上の困難な点については、知識・技能の定着を図ること、授業時数に関することが多く上げられた。男性教員においては、自らの製作経験あるいは製作指導経験の少なさから、児童一人ひとりの進度に対応するこ

表６　指導の重点

	製作に必要な知識・技能を習得させる	衣生活に関する興味・関心を高める	創意工夫ができるようにする	集中力を養う	物を作る喜びや達成感を味あわせる	友達との協力ができるようにする	課題発見能力や問題解決能力を養う	日常生活における実践力を養う	個性を生かして製作活動をさせる	その他
男性	17(85.0)	6(30.0)	2(10.0)	0(0.0)	19(95.0)	7(35.0)	2(10.0)	8(40.0)	5(25.5)	0(0.0)
女性	101(89.4)	42(37.2)	31(27.4)	5(4.4)	96(85.0)	25(22.1)	6(5.3)	40(35.4)	23(20.4)	0(0.0)
全体	118(88.7)	48(36.1)	33(26.3)	5(3.8)	115(86.5)	32(24.1)	8(6.0)	48(36.1)	28(21.1)	0(0.0)

表７　製作活動の指導上の課題

	子どもたちに製作に対する興味・関心を持たせること	子どもたちに製作に必要な知識や技能を定着させること	子どもたち一人ひとりの進度に対応すること	子どもたち一人ひとりの興味や関心に合わせた教材を用いること	安全面や実習中の環境整備（掃除など）の指導をすること	実習にあてる授業時間に関すること	実習費用に関すること	実習施設（教室・被服室）に関すること	用具（ミシンなど）に関すること	自分自身の被服などの製作経験に関すること	授業をサポートしてくれる人材の確保	その他
男性	1(5.0)	9(45.0)	13(65.0)	1(5.0)	2(10.0)	10(50.0)	2(10.0)	2(10.0)	12(60.0)	5(25.0)	9(45.0)	0(0.0)
女性	2(1.8)	63(55.8)	26(23.0)	15(13.3)	23(20.4)	57(50.4)	3(2.7)	21(18.6)	57(50.4)	6(5.3)	43(38.1)	1(1.0)
全体	3(2.3)	72(54.1)	39(29.3)	16(12.0)	25(18.8)	67(50.4)	5(3.8)	23(17.3)	69(51.9)	11(8.3)	52(39.1)	1(0.8)

表８　製作活動の意義

	生活技能の習得	衣文化の伝承	消費者として衣服の機能を理解し、選択・購入すること	繊維や布の性質の理解	感性の育成	自己表現	ものづくりとしての達成感・満足感	環境問題・福祉問題など社会的課題に関心を持つこと	生涯学習へつなげること	将来の進路選択に役立てる	その他
男性	20(100.0)	0(0.0)	3(15.0)	1(5.0)	0(0.0)	1(5.0)	14(70.0)	3(15.0)	9(45.0)	0(0.0)	1(5.0)
女性	104(92.0)	15(13.3)	25(22.1)	12(10.6)	13(11.5)	29(25.7)	88(77.9)	14(12.4)	45(39.8)	3(2.7)	3(2.7)
全体	124(93.2)	15(11.3)	28(21.1)	13(9.8)	13(9.8)	30(22.6)	102(76.7)	17(12.9)	54(40.6)	3(2.3)	4(3.0)

とが困難であると捉えていた。

さらに、製作活動で身につけた知識や技能を、学級活動や総合的な学習の時間など、家庭科以外での学校の活動や学習につなげ、生かしているという実態が理解できた。

製作活動に対しては、その意義を「製作技能の習得」や「もの作りとしての達成感や満足感」にあると捉えていた。

以上のように、製作活動を指導した教員からみて、子ども達は家庭科の他の教材よりも意欲的に取り組んでいるので、その意欲を大事にすれば、これまで以上に製作活動を中核にすえた衣生活学習のあり方を検討することが必要になる。

その際、製作活動の意義として強くとらえていたのは、生活技能の習得とものづくりとしての達成感・満足感の２点であった。したがって、製作活動を中核にすえた衣生活学習としては、さらに被服材料、着方や手入れなどについても指導できるように教材や指導方法の工夫が求められる。

引用・参考文献

1） 増田順子. 被服製作実習の意義について. 家庭科教育.66巻8号. pp.56～60. 1992.
2） 多々納道子. “ 着ることの学習指導 ”. 初等家庭科教育学.田結庄順子編. 協同出版.pp.113～124. 2002.
3） 高木直. “ 被服製作実習の学習意義と課題 ”.市民が育つ家庭科. 大学家庭科教育研究会編. ドメス出版. pp.125～135. 2004.
4） 常見育男. 家庭科教育史. 光生館. 1972.
5） 朴木佳緒留、鈴木敏子共編. 資料からみる戦後家庭科のあゆみ―これからの家庭科を考えるために―. 学術図書出版. 1990.
6） 日本家庭科教育学会編. 家庭科教育50年新たなる軌跡へ向けて. 建帛社. 2000.
7） 文部科学省. 小学校学習指導要領解説家庭編. 開隆堂出版. 2004.
8） 全国小学校家庭科教育研究会編全国調査のまとめNo.41. 全国小学校家庭科教育研究会. pp.17～18. 2004.
9） 竹吉昭人、多々納道子. 小学校家庭科における布を用いた製作活動の学びの実態. 島根大学教育臨床総合研究. ４. p.135. 2005.
10） 鈴木明子、古田幸子. 家庭科衣生活領域における被服製作の取り扱いの現状と展望（第２報）－高等学校普通科の実態と考察―. 広島大学教育学部紀要第二部. 第42号. p.172. 1993.
11） 鈴木明子. 高等学校家庭科における創作活動の教育的意義に関する一考察. 長崎大学教育学部教科教育学研究報告. 第29号. pp.86～87. 1997.